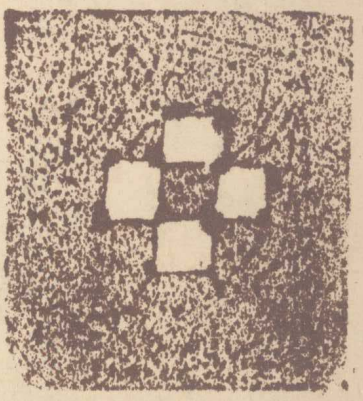
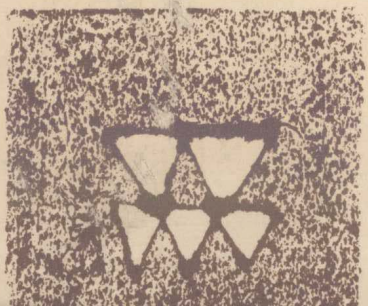
男の居場所

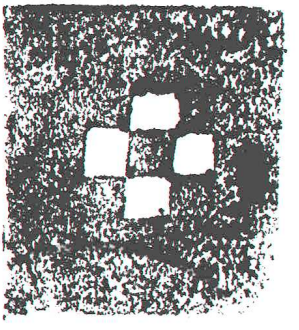
八木義徳





北海道新聞社

男の居場所



八木義徳

北海道新聞社

八木義徳（やぎよしのり）

1911年（明治44年）10月，北海道室蘭市に生まれる。
室蘭中学から北大（中退）を経て，昭和13年早大仏文科卒業。学生時代から横光利一に師事。
昭和19年「劉廣福」により第19回芥川賞受賞。
昭和52年「風祭」により第28回読売文学賞受賞。
主な著書に「母子鎮魂」「私のソーニャ」「摩周湖」「風祭」「海明け」などがある。

男の居場所

昭和五十三年十月七日印刷
昭和五十三年十月十七日発行

著者——八木義徳
発行者——戸田正彦
発行所——北海道新聞社
札幌市中央区大通西三丁目
定価——一、二〇〇円
印刷所——大日本印刷

0094—23099—7806

八木義徳随筆集　目次

I

歌と句とりんごの花と　10
句をつくる日　16
仕事部屋から　24
シラケと笑い　31
ある非常勤講師の弁　38
儀礼と言葉　46
ある弁明　53
日　記（41年10月）　56
転居の弁　61
団地暮らし　65
日　記（46年10月）　70

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

地球儀をもらう 74
内なる風景 77
人生の曲り角 82
見物席から 87
二度目の旅 90
T君のこと 93
映画を観たあとで 98
二つの会 103
不器用者の弁 108
さまざまな声 112
苦痛について 116
父の墓 122
オホーツクの流氷 126

Ⅱ

師・横光利一に　132
色褪せし守袋　142
横光利一と椎の木　149
慕情無限　153
正宗白鳥氏の思い出　161
人としての舟橋さん　164
義秀さんの思い出　170
義秀文学碑の一日　174
浅見淵さんを悼む　178
和田芳恵さんを悼む　183
和田さんの顔　187

平野謙氏を偲ぶ　192
伊藤整さんの仮面　197

Ⅲ

緑酒に美女の影宿し　202
視角ということ　211
なつかしき師たち　215
自然描写のことから　219
風景をみる眼　223
母なる大地　227
二つの世界の文章　233

一冊の本から　236
書評禍　241
海性と山性　244
小説家とは？　249
男の居場所　254
あとがき　258

男の居場所

装幀　栃折久美子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

I

歌と句とりんごの花と

ある大手の私鉄の出しているPR雑誌から「あなたがこれまでお読みになったもののなかで、最も旅情を感ずる和歌と俳句をそれぞれ一つずつあげて下さい」という意味のアンケートがきたことがある。

私はそれに次のように答えた。

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山　西行

一つ家に遊女も寝たり萩と月　芭蕉

このアンケートに答えたのはもう六、七年も昔のことで、それに肝心の雑誌もどこかへ紛失してしまったから、他の諸家がどんな歌と句を挙げていたかは全く思い出せない。が、とにかくその答えが千差万別であったことだけは確かである。

旅情というものは、人さまざま。本来きわめて主観的なものであるらしい。たとえば、おなじ西行の歌をえらぶにしても「心なき身にもあはれは知られけり鴫たつ沢の秋の夕ぐれ」をあげるひともあるだろう。またおなじ芭蕉の句なら「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」をあげるひともあるだろう。

いや旅情ということなら、あの「旅の歌人」として知られた若山牧水の「幾山河越えさり行かばさびしさの果てなむくにぞ今日も旅ゆく」という有名な歌をすぐ頭に思い浮かべるひともきっと多いにちがいない。だが私自身は、この歌にはある過剰な、つまり厭味なセンチメンタリズムを感ずるだけで、旅情というようなものは全く感じない。

そうは言いながら、それならなぜ私のさきにあげた西行の歌と芭蕉の句にとくべつの旅情を感ずるのか、とひとに質ねられても、私はうまいぐあいに説明することはできない。しかしこの西行の歌と芭蕉の句をくちずさむと、私の心のなかに或る濃密な旅情が音楽の旋律のように湧いてくることだけは確かな事実なのだ。

あれはたぶん昨年の初夏のころだったと思う。私は友人と二人、本郷の東大前通りの狭い舗道をぶらぶら歩いていた。すると眼の前に何台かの大型バスが停まり、そこから修学旅行らしい女子学生の一団がぞろぞろと下りてきて、私と友人はたちまちその制服姿の少女たちの群れに包まれてしまった。少女たちの頬(ほほ)はどれもこれも艶々と光って、肌の死んだ都会の娘には見

られぬ健康な血の色が鮮やかに美しかった。バスの窓に貼りつけた紙には、東北のある小さな町の女子高校の名前が書かれていた。

私はその少女たちの一団をやりすごしたあとで、ふいに友人にいった。

「おい、あの娘さんたちのほっぺたを見たかい、旅情を感ずるねえ」

友人はけげんな顔つきで私を見返したが「なぜ?」とはいわなかった。私もなぜかを説明しなかった。

しかしこの場合、私の感じた〝旅情〟なるものを、もし無理にでも説明しろといわれれば、私はたぶん次のように答えただろう。

私はその東北の女子高校生たちの艶々と光った血色のいいあかい頬から、反射的に「りんごのような頬の乙女」という例の通俗的な形容句を連想し、その連想がまた反射的に私の故郷である北海道の初夏にむすびついたのだろう。ことに私が北大の一学生として三年間をすごした札幌郊外のりんご園では、五月がりんごの花ざかりであった。あった、と過去形でここに書くのは、私にとってなつかしいあれらのりんご園たちは、いまやほとんどが無惨に伐り倒されて、いずこもおなじ殺風景な新興住宅地に一変してしまっているからである。

札幌郊外のりんご園は、私の青春期の鬱屈した性の悩みと分ちがたくむすびついている。りんごの花咲く五月ともなれば、私はよく学校をサボっては、下宿からかなり遠い豊平川畔のりんご園へひとりで出かけたものだ。絣(かすり)の着物にチビた駒下駄、そして三尺帯のあいだに汗取り

の日本手拭いをはさんで—というのが、当時の旧制高校生の風俗であったが—約四キロほどの道をてくてくと歩いて、あたり一面、うすく紅を暈かした白い巨大な花雲の中へさまよいこむと、私の全身はたちまちむせるような花の香りに包まれ、やがてそれは得体の知れぬ性的快感として、私の肉体の活力に充ちた若い細胞のすべてを悩ましく刺激してくるのだった。

だが、私にとってなつかしいあのりんご園も、いまや、すでに姿を消してしまった。同時に、わが青春期におけるあの旺んな性の苦悩の季節もすでに遠い過去のものとなった。現在の私には、札幌郊外のりんご園も一片のノスタルジーの対象にしかすぎない。しかし、あれから四十年という時間を隔てた、ある晴れた五月の一日、東京という大都会の一隅で偶然に行きあたった東北の乙女たちの「りんごのように赤い頬」の色を見たとき、ふいに青春回帰のノスタルジーが私のうちに甦えり、それが反射的に〝旅情〟という言葉となって私の口から飛び出したのであろう。

試しにいま「旅情」という言葉を広辞苑で引いてみる。「旅中の心。旅人の心情」としてある。いかにも辞書的解説で味もそッけもないが、これ以上の説明を辞書にもとめるのはまァ無理というものだろう。

私の考える旅情というのは、ある時は未知なるものへの誘いであり、またある時は失われた過去への回帰でもある。人によってはまた、旅情とは機械化された日常生活からの離脱による自己解放の感情である、という者があるかもしれない。いや、そんなシカツメらしいものでは

なく、たとえせまい四畳半の部屋のなかにひとりぼんやり閉じこもっていても、そこに〝漂泊〟というもの思いがあふれてくれば、それがすなわち旅情というものさ、という人間がいるかもしれない。

そのいずれであっても、私自身はかまわない。旅情とは広辞苑のいうがごとく「旅中の心、旅人の心情」であるとすれば、要するにそれは心もしくは心情の問題なのだ。われとわが心を現実の次元から他の次元へと移し変えることなのだ。

げんに私は、ある音楽を聴いていて、ふいに旅情を感ずることがある。ある絵を観ていて、ふいに旅情を感ずることがある。ある小説を読んでいて、ふいに旅情を感ずることがある。この感情の転化の瞬間は実に愉しいものだ。

ある日、私は街の盛り場の喫茶店で珈琲を飲んでいた。私のすぐ隣りの席では女子大生らしい三人づれの若い娘たちが、テーブルの上に大きな北海道の地図をひろげ、何泊何日間かの旅のプランを熱心に打ち合わせている。一人は汽車や汽船やバスなどの発着の時間を調べ、一人はそれらの乗物の走行距離を計算し、一人はまたそれらの乗物に要する金額の計算をいちいちこまかくノートしている。彼女たちにとって、旅とは漂泊ではなく、まず何よりも徹底的に合理化された数字の計算なのであった。肝心の〝旅情〟は一体どういうことになるのか。いや、彼女らには彼女らにふさわしい旅情があるのだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c